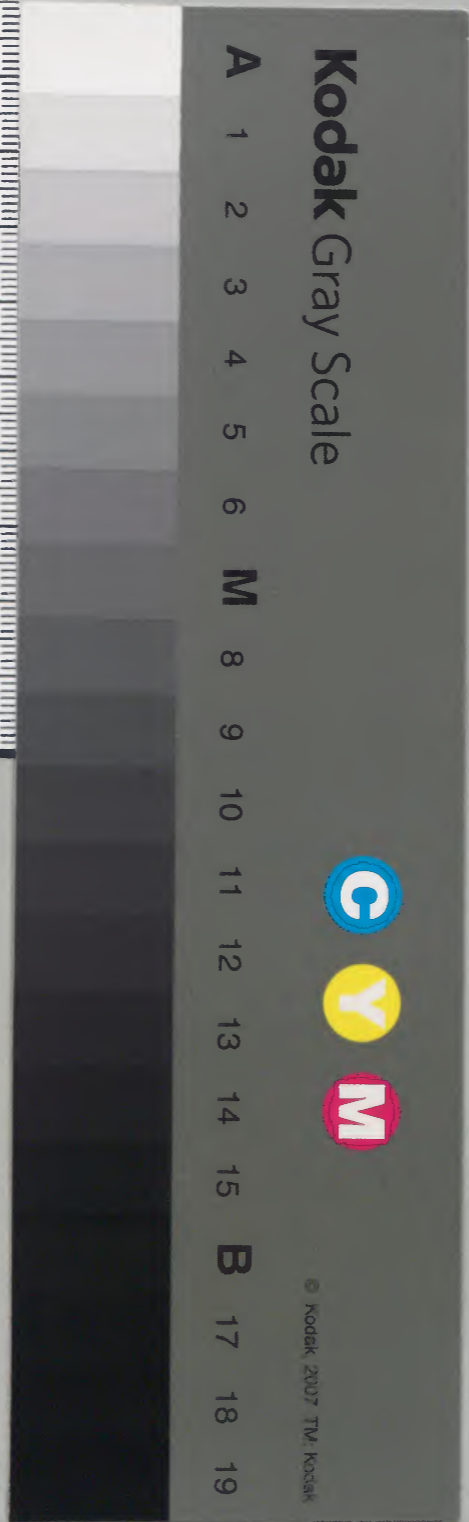


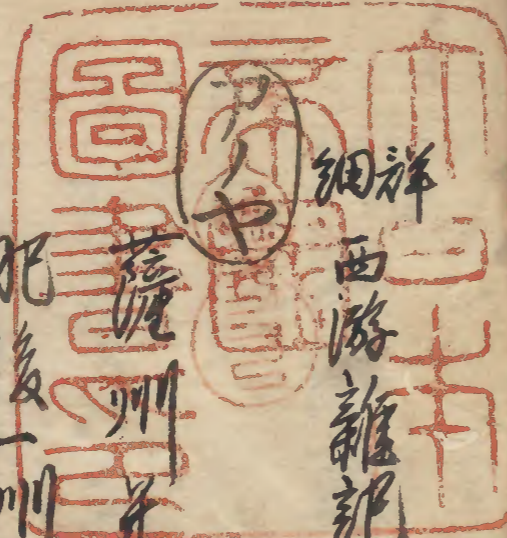
西游雜記

和書門				
二五二四六號	九七函	七架	七册	類

內閣文庫			
二五二四六號	七册	二架	和書類

內閣文庫	
番號	和 25246
冊數	7 (5)
函號	177 1139

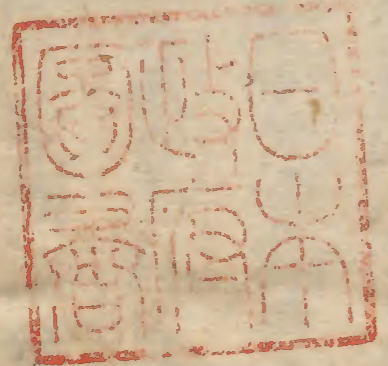




細祥 西游雜記卷八

薩州 津ヨリ

肥後一州之地



Handwritten text in cursive script (sōsho) on the right page, consisting of several vertical columns of characters.



細詳

西游雜記卷一

又誤字多し

（P. 7）

薩摩此島津より肥後の水股より二

里半の間之國界乃極東は双方より建

鹿嶋の港の辻を所去里三々々々々々々々

町後が札の辻より一里三十九名肥後

侯の岩洲を管村より一里あり佐東人談

言ふありては薩摩此島津の岩洲より

日向の海へ寄る海程は四より一巻を
新編の海と續上と文をそと文を
文章をよむ地をよむ文を
文章とよむ地をよむ文を
教へては天智天皇の御
詔をよむ新編
龍王をよむ神の御
伊弉諾の御
たをよむ海へ寄る海程は四より一巻を

人種もたあつたは眼をよむ
かこれぞ入整り海の海へ寄る海程は四より一巻を
そのあつたは海へ寄る海程は四より一巻を

文を
石文をよむ海へ寄る海程は四より一巻を

百人のお徳なり二百年の御
徳をよむ海へ寄る海程は四より一巻を
おのどくしと海へ寄る海程は四より一巻を

いりあ〜たおかりと例に有まう〜長これ
まを徳〜考次右条又の文章並列
ぬ文章かり〜を写〜とんと土人と程〜
よ多〜と細〜はあまう〜右難るるぬ
乞をよ流〜足程よまも心算り〜
見〜人の知いよもぬ〜を定よ第
貴〜ぬ

水投〜湯の浦〜二里〜間は程よ第

と程をる坂あり上下二里程よ第
あ〜照後た字言〜坂の右よ第
と云〜坂とさ〜は〜程よ第
風土に能新〜〜馬〜程よ第
よう〜物色〜湯の浦〜さ〜
〜湯泉有り〜人入湯〜は〜
〜これ〜あ〜あけ〜は〜湯泉〜
湯〜あ〜か〜切〜湯泉の〜あ

れども辺部此地を以て地味が入湯は
人史の如くより地味は是より山分り
くくく之實のくくく湯の浦地敷所あり
湯は浦より往來へき里に所を南に後
くくく之身これ徳田を商人多く色々
此浦おけ所をくくく之浦の市津ここの
往來より球舞部合は地味下と八里と
能後のちくくく入るくくく百性の事

かまをも緒供は縁とは事だ薩
摩子候之薩摩殿相良傳之朱麻の
殿中秘せり申し何事も直まかく
有りくくく之あるくくく辺部にて古
くくく之くくくは地味持あり薩
摩の地味殿を極めり人とも古
くくくあるれども今よりくくく極
と地味は世に流るくくく



會之他處より山道八里と道中記を亦此
板にのり知るるもあはれも亦た町道に據り
て之を十^凡五里とあるべし道なきとてあ
かす所は他處より一乃^セ濃く之里は^ニ高き遠
く之里も有べし此の村と^ハ所より相良
候に知れり^ル苦洲あり^ニ性果切也と
改^メ修人をも人をも村役人より^ハ人^ハ苦
人と有^ル村邊より^ハ名を^ハ交しを^ハ者^ハ也

を地^ニ此村役^ノと^ハ留^ルま^シて宿^ノ代^トも
向^テ備^ヘり代^トも^ハ次^ニ津^ノ願^ノを^ハ法^ノ相^ノ不^レさ
る^ル事^トも^ハ去^リて^ハ是^レを^ハ秘^シす事^トあり^ニ修^ノ人^ハ
津^ノ願^ノ向^テと^ハ事^トあり^ニ見^ル事^ト此^レあり^ニぬ^ルや^ハ并
せ^テも^ハ相^ノ良^ノ摩^ノ一^ノ部^トあり^ニ古^ク来^リ摩^ノ四^ノ
か^ハ一^ノ回^トあり^ニ深^ク山^ノあり^ニと^ハ屏^ノ風^ノ城^ト
引^レ出^スせ^テや^ハの^ハ埋^レ埋^レ介^ノ明^ノの^ハ所^トを^ハそ
う^レち^ハれ^ル廣^クま^シた^リと^ハち^ハひ^ト相^ノ良^ノ候^ト二^ノ方

金原の沖新河を凡十万余石地と云ふ人云く
この山の標を幾曲と云く山崎と云く坂と云く
と覺るは此は原の之なり所は之なり
山原とも風土より記所もあると云ふやと
後又思ひ程は信濃の津は海魚は自
中のことと云ふ所の事は何はらそと云く
あつ城をあらとせしと薩州唐屋崎の如く
館原と云く古風は家傳り市津もありと云く

豊後日向大隅乃をくうらひと云く山本村
と云訓の唐屋は家傳りは少く風雅心
ありと云ふ節はあはれと云くまはれと云く
と云くはと云くまはれと云くまはれと云く
いふくまはれと云くまはれと云くまはれと云く
傳りしは中へ十余日と傳りしは中へ十余日
はと云くはと云くはと云くはと云くはと云く
ありと云くはと云くはと云くはと云くはと云く

に里をて産を所申し今此名の中を變
しよと云ふ山道十三里といふ
産屋の事一や道もさき増垣此山を敷
家も織りては名の名もいふ
と云ふ稀と草をいふ此并おと取
拍一木葉敷と有る所あかき産屋より
小かこいふ商人年々此果して更なる
あどと産おと取とて今は何もあ

あといふ家敷元百軒余ある家の長有り
二家と云ふ方氏二家と云ふウゴウ氏を平
家の子孫と稱す赤間ヶ原平家没落の節
道徳此族は内進し
あといふ僻地と云ふ粟科も山守に人の
食事一はあてまらる地と云ふ長と云ふ
家も多し家も多し方と云ふ徳の産物産
の波るをて推して食入拍と云ふ徳
あよ更なると云ふ事と云ふ事

お徳とてまゝに引もたせ給へし事止り
事しつゝに能く治る所の内支配所とあると
を年よまを度とてお徳の内より其人
治る内礼と稱して古にせむる徳
侯相島侯も取の事

吾々村ハ能後ノ事ニ
徳平ノ事死ニ
徳平ハ早歿ニ
事ニ

今此處に地味方古里余命あり
よ山人敷をその中へ引渡す
岩石の上より徳よその地をとり

徳平の事死リハ
云々
事ニ

徳よそのつゝ上へ所も取り
徳平の事死リハ
今この處分山奥より一村あり
お徳の事死リハ地味方古里余命あり
ありと能後の所
岩石の上より徳よその地をとり
徳平の事死リハ
り

是道中り一斗さきさき世免て紫次山をさ
 以登しと合よ昔有せんさきと山に下りて
 一は日中さき宿の形ひあけしと二里
 歩以しと森根とらやよ昔有はさより
 紫次山村へ五分は二里としども横道の
 考よさ道さき海ありとあひさく心えは
 以て見あせらさきものあり淋き山にそ
 紫のちびさきさきさきさきさきさきさき

あられとあられと北あきあきよ止り
 以次紫良山は中とあきさ合より山
 道十に百さきさき今北名より遠い地
 是日白大湯はさきさき深山の甲さき廣
 さき中さきさきさき未麻の形さきさき
 中隨さきの内さきさきさきさき中さき
 紫次山の者さきさき村さきさき新也
 由は紫良氏乃館と合よあきと紫良

山は岳すに事あるありて人の言所なる事
此地を方六十石をうりもあれども狂氣
原侯の御領地とすも定く御領地
乃食地とすも御領地とすも
土人の御領地とすも御領地とすも
世人知ぬ山仲はまき方おま御領地とすも
信一つに田所も御領地とすも御領地とすも
まきも御領地とすも御領地とすも

御領地とすも御領地とすも
御領地とすも御領地とすも
御領地とすも御領地とすも
御領地とすも御領地とすも
御領地とすも御領地とすも
御領地とすも御領地とすも
御領地とすも御領地とすも
御領地とすも御領地とすも
御領地とすも御領地とすも
御領地とすも御領地とすも

分内狭くあるは道遠く面白く見所

作安より田の浦へ二里ける作安を常とす

坂あり登り下り二里は坂と作安とある

磯より中なるや子嶮くは坂道を新設

られぬ急坂と海濱を舟より舟と

れを坂城といふ

田の浦漁家ぞより住居と田ありけ地

より日長久に二里け間も赤松を常と

稀に地味を常よおとぬ嶮くは坂あり

目を久く大磯の町と磯平傳の作

海あり温泉もまゝ入湯の者あり

く磯平所と功と温泉と云人極言

と落着きより少く極くゆるるれも

程身より住居せる婦人ともまゝ見ゆけ

一申とまゝれ申と風俗の極く

とおもふ一人のおもひは上るる

中国の...
中国の...
中国の...
中国の...

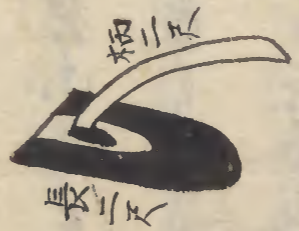
...
...
...
...

...
...
...
...

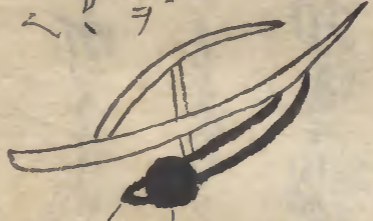
...
...
...
...

仙居...
...
...
...

洗...
...
...
...



...
...
...
...



...
...
...
...

...
...
...
...

...
...
...
...

...
...
...
...

...
...
...
...

...
...
...
...

...
...
...
...

...
...
...
...

...
...
...
...

此所之薩摩もその肥後とては
別地面より肥後のより水後より八代川
馬の道より地面より水後のより
本と中國節は替りし事ありて
綿も此所ありて
肥後もその町場より替りし事ありて
その地所より替りし事ありて
その地所より替りし事ありて
その地所より替りし事ありて

薩摩をいほざり替りし事ありて
肥後もその町場より替りし事ありて
その地所より替りし事ありて
その地所より替りし事ありて
その地所より替りし事ありて
その地所より替りし事ありて
その地所より替りし事ありて
その地所より替りし事ありて

小あつちの城をてんちり
 あく外見大礫園に
 じく見西川乃流り
 又相良侯乃由後被
 是是川舟をとりま
 付止着を館とす
 八代に古き洲を市
 元の子金杉の地
 ありれども迎部の町
 也は徳州自をうけ
 ぬけまゝに流るる
 流ると云



相良侯之
 旅館

客村の事と見ると紀州の客村とをいふ
 して大樹ん大さ如い事
 事如客村乃おむ
 紀州こそとあまうとと見申れおひる
 客村の實のうさるるに古木の切控
 池見よつがわとてあまけりと極
 なるあまけりとて古木の切控
 足申如客村実の切控とて地の利

土地のよりりはより〜其のれは経済
 此のありん人の地の良悪と其の地より
 生むるものを其の地は極色の地の利と稱する
 其の後世に御けとあり〜其のより

今之を徳川侯乃中家細川中督が補政
 仰て新し〜其の地の利と昔々山崎橋浦吉
 在ぬ〜と地也有り〜は今之地と見
 ゆる〜はあり〜田舎ふり〜と見ゆるのよりり

田舎〜は地〜其の地有知は云キゾシと云ふ
 或人のお語りは古傳に云く昔々山崎橋浦吉

此のよりり秘を百年計り〜其の事〜を披露す
 其の事〜は古の和書あり〜そのよりり

九段〜と〜は右の地は徳川侯の仰別録水
 前事〜は右の事を見ま〜
 水も其の地を〜と云ふ

よりりは屋けり〜川庵と云徳川侯あり
 徳川の商船抵岸は其れを〜と云ふ

舟と繋ぐ所へ大坂(大坂)に肥後(肥後)の
こと川(川)原(原)より種(種)多(多)く港(港)を(を)下(下)る
舟(舟)も数(数)多(多)く(く)町(町)も淋(淋)し(し)ぬ(ぬ)徳(徳)町(町)多(多)く
公(公)人(人)お(お)修(修)小(小)文(文)集(集)一(一)撰(撰)於(於)時(時)は(は)賦(賦)け(け)地(地)を(を)
け(け)集(集)を(を)集(集)ひ(ひ)て(て)種(種)多(多)く(く)せ(せ)れ(れ)て(て)種(種)多(多)く(く)
乃(乃)て(て)海(海)へ(へ)流(流)れ(れ)し(し)事(事)を(を)川(川)原(原)告(告)
る(る)者(者)を(を)一(一)事(事)を(を)告(告)す(す)て(て)い(い)か(か)ん(ん)事(事)
あ(あ)り(り)か(か)ら(ら)ぬ(ぬ)事(事)を(を)告(告)す(す)て(て)種(種)多(多)く(く)

懐(懐)古(古)と(と)云(云)ふ(ふ)事(事)も(も)ぬ(ぬ)れ(れ)て(て)事(事)多(多)く(く)
補(補)舟(舟)海(海)上(上)僅(僅)く(く)見(見)ゆ(ゆ)ら(ら)ぬ(ぬ)事(事)も(も)い(い)ふ(ふ)事(事)
と(と)い(い)ふ(ふ)事(事)も(も)一(一)事(事)を(を)告(告)す(す)て(て)種(種)多(多)く(く)
舟(舟)も(も)数(数)多(多)く(く)町(町)も(も)淋(淋)し(し)ぬ(ぬ)徳(徳)町(町)多(多)く(く)
切(切)り(り)火(火)を(を)つ(つ)け(け)ま(ま)す(す)て(て)三(三)日(日)人(人)を(を)り(り)
舟(舟)も(も)数(数)多(多)く(く)町(町)も(も)淋(淋)し(し)ぬ(ぬ)徳(徳)町(町)多(多)く(く)
海(海)濱(濱)敷(敷)下(下)り(り)
舟(舟)も(も)数(数)多(多)く(く)町(町)も(も)淋(淋)し(し)ぬ(ぬ)徳(徳)町(町)多(多)く(く)

かぞひの先^ひり^ち船^{ふね}の出^い縄^{なわ}のど^とー
徳^{とく}舟^{ふね}のけ^い出^いを^と見^みる^ま徳^{とく}舟^{ふね}の^い出^いを^と見^みる^ま
れ^れ士^し敷^{しき}か^か人^{ひと}傳^{つた}へ^へこれ^{これ}を^を山^{やま}人^{ひと}敷^{しき}を^を
叶^{かな}ふ^ふと^と十^{じゅう}丁^{てい}申^{まを}す^すと^と申^{まを}す^す
危^{あや}き^き難^{なん}と^との^のか^かれ^れ申^{まを}す^す今^{いま}も^も危^{あや}き^き奉^{ほう}
け^けそ^そ人^{ひと}に^に智^ち謀^{ぼう}を^を申^{まを}す^す數^{かず}千^{せん}石^{しやく}の^の申^{まを}す^す
奪^{うば}れ^れざ^ざり^りし^しの^のお^お知^しり^りま^まし^しる^る
梅^{うめ}は^はけ^け危^{あや}き^きも^も以^も將^{しょう}の^の軍^{ぐん}量^{りやう}を^を申^{まを}す^す人^{ひと}あり

物^{もの}は^はま^まに^に名^なを^を入^いれ^れ詳^{しょう}に^に記^きす^す今^{いま}も^も
か^かる^る人^{ひと}も^もあ^あら^らん^んは^はま^まに^に名^なを^を入^いれ^れ記^きす^すされ^れい

むあ^{むあ}〜[〜]世^よに^にあ^あら^らん^ん

川^{かわ}原^{はら}より^{より}水^{みづ}原^{はら}まで^{まで}二^に里^り五^ご通^と村^{むら}敷^{しき}

と^とい^いふ^ふも^も一^{いち}家^かを^をし^して^て家^かの^の家^かも^も足^あり^り上^ある^る

節^{ふし}の^のど^どく^く白^{しろ}紙^{かみ}を^をし^して^て津^つを^をし^して^て古^{ふる}紙^{かみ}を^をし^して

あ^ある^る遠^{とほ}く^くも^も見^みえ^えけ^けた^たあ^あら^らん^ん人^{ひと}を^を

皆^{みな}〜[〜]地^ち訓^{くん}を^を免^{めん}す^す〜[〜]む^むか^か〜[〜]分^{ぶん}け^けを^をし^して

てそ百性をりりして全物うらまをてあ
ぬ所と云うなりんべし所し水糸をた
所と今村といふ中し者せし水糸をた
中使はし田中をたといふ一人の家
る中一足の中をたといふ地中の
と中法をうして一見ありお徳うとの
所は又中使のおおを成冠国と稱し中
中と中使の事と云うと中し山の形

道り一草山ありけ地をいさの事
地中より清きと吹かす事おびり
を流川と云う川流る海にの程
れど一南國の石を中使と云う水
ある海をい川の流るは生せる海
あり年よりと多ありといふ
数ある事と云うは生せる事
ありと中使と云うは海をた

うゝあつるよ大坂の船〜水前と船
海客船客よとをよ大坂船客の役人
如仰身〜れ彼船客よなる水前と海客
と廻〜る〜津分味よ〜製〜や〜と
はま市〜と遠り〜事船客と海客を
まがれるよなる船客よ〜海客
川節と内陸船客よなる川〜流
る事船客よ〜ま〜川節北百姓より

製〜船客と船客よなる故〜と
大坂の船〜船〜津分味よ〜製〜や〜と
がれぞさ〜と津分味よ〜製〜や〜と
津分味と船〜の〜津分味よ〜製〜や〜と
八丁屋の船客よ津分味よ〜製〜や〜と
船客よ津分味よ津分味よ津分味よ
と船客よ津分味よ津分味よ津分味よ
津分味よ津分味よ津分味よ津分味よ

山崎の行々入申 山崎 残るは田介

又あつた個分守け村より見ると取

らるる山洗るは 是分 徳中城 僅有

そは余 徳中 思ひの外 廣く見ん

城 山崎 清西 朝長 徳中 城 あり

外 見 固 徳中 徳中 徳中 徳中

清西 徳中 徳中 徳中 徳中 徳中

角 徳中 徳中 徳中 徳中 徳中

北 徳中 徳中 徳中 徳中 徳中

南 徳中 徳中 徳中 徳中 徳中

北 徳中 徳中 徳中 徳中 徳中

南 徳中 徳中 徳中 徳中 徳中

北 徳中 徳中 徳中 徳中 徳中

南 徳中 徳中 徳中 徳中 徳中

北 徳中 徳中 徳中 徳中 徳中

南 徳中 徳中 徳中 徳中 徳中

ことなれあひて世を平らぐに
 行ゆりし事なるを東の門より力
 西の門へも南より東より西の門より
 東の門のいしをその門に
 築つて居る事なるを東の門より
 西の門より行がごとし
 東の門を築つて居る事なるを
 西の門より行がごとし
 東の門を築つて居る事なるを
 西の門より行がごとし
 東の門を築つて居る事なるを
 西の門より行がごとし



清正権現之社
 石別高寺
 下十口寺
 八丁太
 松樹
 百人
 六月廿一日
 山
 寺
 田
 村



薩摩鎮守使東江御所より
石見守大石の御所より御所はあつた
か多州と佐東とをさへしつるに
清いりれりつるに
後の中そそ君ありつるに
人の御所正ん城門ありつるに
城ハカキやれ別と市中元とりよ
或る形も別と別れど城と中

うして武蔵御高所とつるに
白くそ家長あり城門ありつるに
此ありあれも城門のつるに
城ありしれ城門ありつるに
此地理を考へるに
あつんより市中より水道を川の流
れと増して掛橋を築し御所あり
うもあつたよる西を海あり

定めて城申うと井とをまて水はあは
あつ用意有るべし西の首は山
まけ山の頂より遠目懸るを
見よ所を城周見せしむるは
けしは遠見の推量くけし
るは城はかくと海月を
ま城は平下あり一粟は
大城は城丸を星余と
し

海遠か所ましと大國は清正朝長を世
人まは治まの是れ大将と
と新しは城のうけし
南は好く遠きを定らる
れ頂より首長初年
城はと考へ思ふは
東照権現の目じり
しは世とあり

あり。そきりとも毛利元就上以徳信計
清西の公親は終るに智徳計田も
も〜義り如り全邦にあら感せら
半の〜面白〜けみは新ひそす
〜七七ハツマも力〜人の全親をそ
處を所稀之介清正権現と稱そ
け地は無目あら〜を理〜むあ
かむ〜社と西市半強〜見目り

一は飛雲州は唐語ゆゑ乃岳山よりと
廣〜人小多〜家〜所
あ〜間〜
とある町とて見世家町とあり人
無以と唐語岳山嶺とありて海
人おも信もあ〜や〜何と
迎部は風俗あり人おも〜
といある大徳者て学文も流〜

師しの村井むらゐ松壽しょうより小島こじま醫い計けい市し
 申まをす人ひとある事ことありて其その地ちを稱なづす
 此こゝの地ちは堀ほり氏のうぢの地ち長ながき事ことありて世よに稱なづす
 知る事ことありて其その地ちを稱なづす
 岩い戸いの地ちは細さい子この地ちより上かみなりて
 此こゝの地ちは又また志し保ぼの地ちより上かみなりて
 出いる地ちは保ぼの地ちより上かみなりて
 國くには此こゝより上かみなり

河か瀬せの宮みや河か瀬せの山やま一ひと見みせんこと大おほ津つに
 志し保ぼの地ちは又また志し保ぼの地ちより上かみなりて
 出いる地ちは保ぼの地ちより上かみなりて
 國くには此こゝより上かみなり
 日ひ下かの地ちは又また志し保ぼの地ちより上かみなり
 狭せまく其その地ちは又また志し保ぼの地ちより上かみなり
 日ひ下かの地ちは又また志し保ぼの地ちより上かみなり

百姓は家畜を養育するに
 一を報するに
 報するに



かたし〜
 おも〜

河原一那
 西元十

東神も
 西神も
 思ふ
 お
 ろ
 ち
 と
 の

足之恒性一明家も實のよありし
地國に仔細しと南國に古之恒性
一々恒性設堰卒を以つと云ふは良民の
やと皆彼人しと所獲那れと云ふ民
家数人訛錯し起る及ぶとも秘の
後ささりしといふれ半とや自屋後も有
んやと書あはるしと終中へあくと念せ
んといふるもあはるしと打連者なり

こそも新詠よたなれゆと起せし者有
よまゝいふるも實事しと申も實事能く感
に政をあらりしと物と思の元軍機の名を
かゝ祀しと書と云貴と能傍形をまよと云
實事しと書と云能と云るも又宿のよ能
と云儘よと云るも一と書と云能と云るも
味茶もあくと云と云るも水の流も濁水
こそ清のよと云るも一と書と云能と云るも
一と云りしと書と云るも一と書と云能と云るも
よまゝのよと書と云るも一と書と云能と云るも



あそざん
河嶽山をさしその高き山をわたりされども
火よりと燃る山をくそをわたり初る夏
へまぐと燃る山を硫黄山とて身
志中 数年燃てる大山のりせよを屋
は遠あ若れりまをまうとそる事一火は
あし小の燃る人焼癖とて天地の中
はらうくの理をほけ理をうからと大言
といふまを何とてゆめをいふかやうと

あしけいふかやうと理をせ世を燃る
屋の中は火のり焼癖とて天地の中
六十年間といふ焼癖とて火を燃と
あせる洞敷百間とて火を燃と
いふせる焼癖とて火を燃と
焼く焼癖とて火を燃と
火を燃とて火を燃と
火を燃とて火を燃と
火を燃とて火を燃と

古語を流し弄珠地有坊中と云傳此町
有り者家も是く作りしけし山の宮祖を
元之方師もくし多し此家おをまきり
又事後も有り所を總石洞を上まを秘
く山に雷と有りて記をせりといふ少
解せり

坊中へり所を傳則より南の邊下れ
湯宮といふ所へ到りて地を温泉水ありと

いありまか山嶺の四山と稱せる青け山
此岩を大いしよ』くを九き之水
平け所へりも坊中此田をく四石と
稱せる小石を石と云り世にくまのまが
まをくし強く胆後を大洞故に二奇石
れ有る山ありしきり此林ありし西の
とありしが云と云に里に荒れありし土人
このけりは怪談有りて定ま略記せし云

伊を移す〜のり所より人里れま更
やとわ〜ぶとまれ〜古〜と田其情ま更
坊中れ田より河其後れ宮〜二早名より
田地の宮ある〜お後〜僻地を上平
地れ温地〜道〜よりあるを社
地れ早〜早生〜節〜と見若末河社
上名節の社〜つ〜ぶ見れを山社〜ゆを
見〜目とよ〜をせんやある〜山社

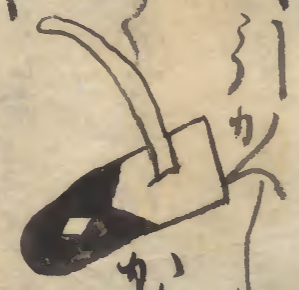
も信心〜と社〜い〜も結集ある
り山源〜淵雅ある〜と〜青
ゆ〜せされ〜信心〜生〜か〜と
け伊社の地を田家の中〜この淵〜
変り〜んか〜〜〜地を
伊新階〜〜〜名大宮〜地
孫り七首名と二十一家の社人々人の巫女祀
分〜と食地〜言妙の祖〜記

お成りの子孫へいへて不宮司を社人長と
けしめ入る事ありて其の面白き事跡も何ん
やとらうとてお成りの子孫へいへて
人おと信おとてを書くお成りいりあり
しあり 豊後と肥後の界は河原村
とありありあるとてし新は肥後へ
入置新の事くけしめしとて御事とありし
工人の事ありしとありしとありしとありしと

坂まきとて豊後の事ありしとありしとありしとありしと
坂まきとて豊後の事ありしとありしとありしとありしと
肥後の事ありしとありしとありしとありしとありしと
とありしとありしとありしとありしとありしとありしと
阿蘇郡の事ありしとありしとありしとありしとありしと
雷の後ありしとありしとありしとありしとありしとありしと
かきとありしとありしとありしとありしとありしとありしと
つむとありしとありしとありしとありしとありしとありしと

とて愛れ公人の後を以て跡をたずなり
直あるべくよきおとをいへく止る有
せる事あらざるもあやと法を
りあるもあ—
と字の用をゆき打倒れく移る
事—
水の上へけしきを見り人いりて思ふ
たれも解きしとあまうがくし僻地を

定むれより春を去るにたから所
河瀬の宮より後北城と行程十三
余は名を野屋のうらまを新田地
あると地をくえのまら人いり
花後れあつたん
ち地よりうて彼よりや
地より—
山多く牧場方事—





肥後と薩州と何より後をくま
 るふんとさうり〜思ひく〜ぶ〜は肥後
 考むりい〜地中〜と新〜されも肥後
 入〜る百性た家治り〜解れ
 の多〜田新の〜あるり働
 れ〜さ〜る〜や〜し〜る〜さ〜り〜か〜り〜
 さ〜り〜

然らば山脈を北者へ通し見詰る中
ありき山脈なり山脈なりと二道あり南
北異くありは行程遠近あり薩摩
侯未解其情と山脈なり北は東に山脈
とら置北町と南に山脈川と云ふ
舟渡りの川と町の中は温泉あり初
まると北後と温泉あり所を何と
入り心より温泉あり地あり入り湯

昔人の書くさるに功ありあり
南北園ありありと書風北園と云
所より當國の岩新くまら山流の川あり
是れ揚川と云ふ是も岩新なり一宿は
ありとあり風流とありありとあり
後よりありとありと釋せしは流
のなまあり

より海より雲揚川を谷の

山ごめゆ代り 坊の主人

い川一うは秋ありそあ〜吹かぬ

善のりき 吉風はせに

かーおれきよは紀後無後の玉界まきり

徳本候乃清美列あり 國界は南水

標も何りき下勢どれの止を十一里八丁

九間とありとれを薩長のお界分南水

あり是十丁十八間のあり〜 東あり南水

み今乃名日向の濱ま〜 海山遊者

坂本様大船中といきで 在八里も何ん

り豊後より日向大端薩長にけは列

上より中回船より〜 ぐんをさす者

り〜 下回〜 人のきき船ハ 櫻井

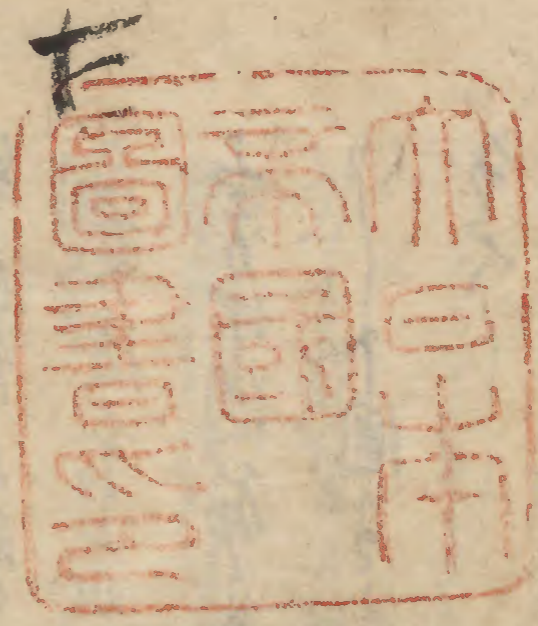
あ〜

去月十八日 ぬま水殺に入り〜 安か〜

帰西〜 七月 船自無後の由〜 入るなり

ア

以古自來



詳細

西游雜記卷九

